

## 生徒達が捉えたノーマライゼーション

～普通科高等学校におけるボランティア学習・福祉教育の意義について考える～

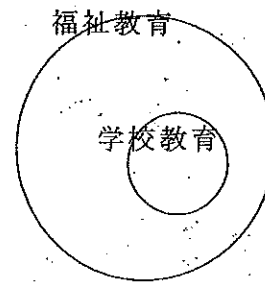
神奈川県社会福祉士会

渡辺 岳

### 【I】素朴に考えてみたい福祉教育

まず、普通科高等学校の授業風景を思い浮かべて戴きたい。筆者はセンター試験対策の数学演習の授業を担当していた。理系クラスでは殆どの生徒が真面目に授業に参加している、文系クラスでは既に数学を捨てている生徒もいる。窓の外の鶯が飛び交う風景に視線をおくっていた生徒が、「福祉とは何か？」と唐突に問いかけてくる。私はそれに対して「誰もが自分らしく、よりよい人生を生きるいくための方法を追求する道である」と大胆に答える。すると生徒は「よりよく生きるって何だ？」「自分らしく、っていうのも、よく分からない」等と問い返してくる。教室はやおら活気づき、内職していた生徒も耳を傾けはじめる。一度、乗せられてしまうと話は脈絡もなく続く。「福祉は誰にとっても身近な問題なのだ……」と偉そうに答えると、歯止めは利かなくなり「そもそも、学校は福祉と云う大きな括りの中に在る」と尤もらしくベン図まで描いて「学校教育は福祉教育の真部分集合であるべきだ」等と宣うている。

図1



高等学校に通う生徒のなかで大多数を占める普通科の生徒達の殆どが、体系的には福祉を学ぶ機会を与えられていない。筆者は「福祉」、とくに教科「社会福祉基礎」は全ての高校生が学ぶべき必須の内容を含んでいると考える。これまでいくつかの勤務校でカリキュラムへの導入を画策してきたが、受験科目中心の時間割では、科目として設定しても生徒が選択できない様な事態が起こってしまう。

筆者は、土曜日や放課後に福祉ボランティア体験学習の事前事後学習として、基本的な福祉の考え方や福祉医療の現場の問題について、専門職を招き T.T 形式で講習を行ってきた。

本稿では生徒達の体験記を紹介し、高等学校におけるボランティア学習・福祉教育のあり方について考えてみたい。

ここでは、生徒達の視点をありのままに受け止めて戴くために、原文をそのまま掲載した。一部には不適切と思われる表記も認められるが、筆者の浅学戯言と合わせてご容認いただきたい。

尚、これらの作品群は生徒達の許諾を得て引用している。

## 【Ⅱ】生きる力

(平成20年、S高校Iさん3年次のレポート)

お年寄りに必要な事、それは設備が整っている病院、スーパードクターと面倒見の良い看護師、どんな病気でも治ってしまう薬。こんなことを思っていた以前の私。これらが間違っている訳ではないが、あるおばあちゃんとの出会いでお年寄りにとって本当に必要な事を知った。「今日、息子が来るの。」おばあちゃんがうれしそうに私に言った。その時は何でこんなにうれしがっているのか分からなかった。次の日、あのおばあちゃんのいる部屋を覗くと、さびしそうに窓を見ていた。楽しそうに話しをしていた昨日のおばあちゃんが今日は何も話していなかった。その時になって私は、初めてお年寄りに必要な事を知った。それは「コミュニケーション」である。人は人生の中でたくさんの人と出会いコミュニケーションをとる。落ち込んでいる時、誰かに励ましてもらおうと不思議と力がわいて来る。あきらめかけた時、誰かの一言でもう一度やってみようと思えば自信がつく。言葉には人の心を動かす力があると私は思う。この力は、人を元気にさせ、時に生きる希望も与えてくれる。私たちはこの力をお年寄りにも分けてあげなくてはならない。2人で分け合うことでコミュニケーションが生まれる。それはきっとお年寄りにとって最良の薬になるだろう。私は会話をしない生活をまだ送ったことがない。学校に行けば友達、家に帰れば家族がいる。つねに誰かが隣にいる生活を当たり前だと思っている。けれど、あのおばあちゃんは私

にとっての当り前が「特別」なのである。今おばあちゃんの隣にいるのは人ではなく、キレイなベッドとナースコールだった。静かなこの部屋には「最良の薬」は見つからない。そこで私は「おはようございます〇〇さん」するとおばあちゃんは「おはよう」とニコリと微笑んだ。この時、私はおばあちゃんに少しでも最良の薬を与えることが出来た。だって今のおばあちゃんは、昨日と同じ笑顔で私にたくさん話しをしてくれるから。

(平成7年、H高校Mさん3年次のレポート)

私は以前、障害者に対して強い偏見を持っていました。街中や駅などで奇声を発したり、不可解な動作をする彼等を見かけると、避けて通るようにしていました。一体何を考え何の為に生きているのだろうと疑問にすら思っていました。夏休みに福祉関係の体験学習があると聞いて参加を決めたのも半分は好奇心という不純な動機だったかも知れません。...

始めのうちは、園生さん達が何かを大声で叫んでいたり、何を言っているのか分からず、どの様に接していけばいいのか分かりませんでした。そして、そんな彼らの様子を見て「こわい」とさえ思い、作業中もつとめて目を合わせない様に下を向いていました。

ところが、作業場はたいへん明るく楽しい雰囲気、半日位一緒に過ごしているうちに怖さも次第に消えていき、徐々に居心地がいいとさえ感じる様になっていったのです。

その時、施設の先生が私にこんな話をしてくださいました。「どうして障害者が仕事をする必要があると思う？なんですか？と思うかも

しれない。でもね、もし私達が何もすることがなかったら？朝起きて、御飯を食べて、寝るだけだったら…？きっと生きていけないと思う。それは障害者も同じ。仕事をして生活にリズムを作るの。仕事が生きていく糧なの。みんな、ここで働いている事を誇りに思っているのよ」これを聞いた時、私の頭の中のどこか欠けていた部分に、この話がぴったりとはまった様な気がしました。……（障害者と言っても、何も私達と違う所はないのだ。みんな一生懸命生きている）この当たり前の事に、私はこの時初めて気が付いたのです。今まで間違った考えを持っていたことを、とても恥ずかしく思いました。私は、今回の体験学習で沢山の事を学びました。この施設の園生さん達は、ただ少し不器用な点が多いというだけで、とても感受性豊かで傷つきやすい人達なのだと感じました。自己表現がうまく出来ずその結果、奇声を発したり自傷行為におよぶのだという事も知りました。

人は生きている限り何らかの活動を行っている。その活動が周囲の人々や社会の中に受け入れられ、参加を果たすことでよりよい人生につながっていく。衣食足りても生き甲斐をもてない人生はつまらないものになってしまう。云ってみれば当然のことではあるが、生徒の視線で解き砕いていくと新鮮な風景がみえてくる。

（平成11年、H高校Tさん2年次のレポート）

7月27日(火)；このクラスには、Bちゃんという子がいます。Bちゃんは眼鏡をかけていて、片足が不自由だから、歩いたり、走ったりするのは、普通の子みたいにはできません

ん。でもBちゃんは、自分では足の不自由を「つらい」などと思ってないと思います。何をすることも一生懸命で、私は、そんなBちゃんを見ていて涙が出てきそうになりました。これから大きくなって、Bちゃんの足をパカにする人がいるかもしれないと思うといたたまれない気持ちになりました。そこからいじめになったりしたら、どうしようかとも思いました。Bちゃんには、自信を持って生きてほしい。自分の足を恨んだりしないでほしい。私はBちゃんを見ていて、今の自分がすごく小さく思えました。

7月30日(金)；今日は、子ども達に会う最後の日です。私はずっと朝から気分がさえません。もっと子供達と遊びたいです。もっといろんなことを学びたいです。でも子ども達は私が今日で最後というのがわかりません。それもまた悲しいです。

私は、子供達の名前も、よくみんなでうたう歌も踊りも覚えました。子ども達とさよならするとき、泣きそうになったけど、こらえました。子ども達が大きくなったとき、ほんの少しでも私の存在が心の中に残っていればいいな一、と思いました。……

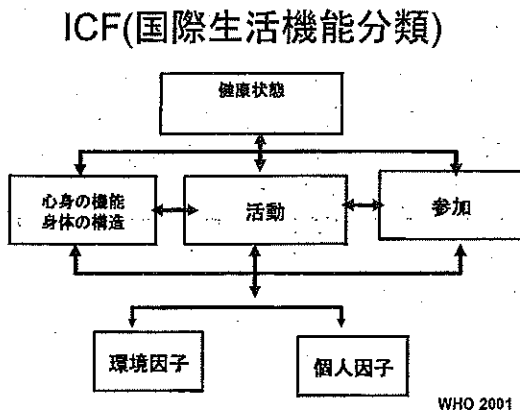
体験学習を終えて；Bちゃんのお母さんが保育園の連絡ノートに私のことを書いてくれました。「お姉さん先生のお陰で、毎日、息子が保育園に行きたがって、今までは保育園に預けるときの、なかなかバイバイできなかつたのに、今はすぐにバイバイできて、とても助かっています。」と書いてありました。私はそれを読んだとき、感動と嬉しさと胸がいっぱいになりました。初めは本当に大変だっ

た体験学習も、Bちゃんのお母さんのお陰で「がんばろう！私を必要としてくれてる人がいるんだ」と思ってがんばりました。

私は保母さんになれるのだろうか？とずっと不安でした。でも体験学習をして、「私には保母さんしかない！絶対になる!!」と自信ができました。たくさん子ども達の支えになってみたいです。

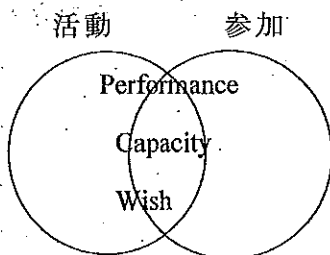
【Ⅲ】ICFの基本的な考え方を用いて

図 2



ICFでは生活機能 (Functioning)としての「活動」と「参加」を Performance (いまできていること) と Capacity (状況が変わればできるであろうこと)によって評価するが、筆者はこれに当事者または学習者の Wish (本当は何がしたいのか) を、評価項目として加えている。

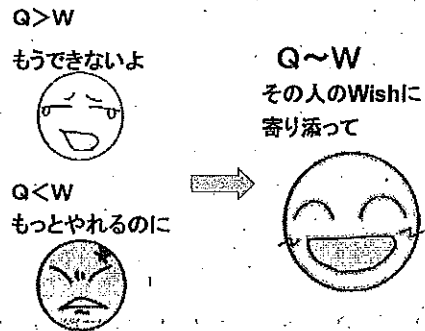
図 3



ICFは福祉や医療の現場ではサービス利用者を観察評価するためのツールとして使用しているケースが多いが、学校教育では、多様な他者を理解するためのコミュニケーションツールとしての活用も可能である。

筆者は、Q (他者から与えられる評価) と W (当事者の願望) の関係を示し、下記の図を生徒達に提示している。

図 4



他者を理解するためには、その人がどのような意思と願望をもっているかと云うことの把握が重要であり、当事者の自己決定の権利を無視することは許されない。それは、自らの意思を十分に表現することができない知的障害者や認知症高齢者の場合でも同様である。

誰もが、日常生活の中で自身の行動を反省したり、悔いたりという事は多々あろうが、日々の行動を多角的に俯瞰し自己評価を行うと云った努力は殆ど為されていない様に思われる。学校現場でも生徒が自らを評価すると云う機会は極めて少ない。

本校では、体験学習における「活動」と「参加」の状況を生徒自身が評価する観点別自己

評価シートを作成し、事後の学習およびディスカッション等の資料として活用している。

現在継続して使用しているものは通常の四観点、『関心・意欲・態度』『知識・理解』『思考・判断』『技能・表現』に『自己理解』を加え五観点とし、「福祉の諸問題を自分自身の身近な問題として捉えることができたか」「自身の個性や性格、適性などについて考えることができたか」「自分の将来や進路、生き方などについて考えることができたか」等、17項目の設問により自身の活動や将来のこと等を考えるチェックシートになっている。

このシートは各設問について、Performanceを◎○△×の四段階で自己評価し、CapacityおよびWishを文章で自由に記述する形式になっている。

【IV】誰もが、よりよく生きていけるように  
-----  
(平成17年、S高校Nさん、3年次の作品)

宿泊施設に到着すると、みんな元気にはしゃいで遊んでいるので誰が糖尿病か分からなかった。でも、昼食前になるとほとんどの子が血糖測定をし、お腹や腕にインスリン注射をしていた。糖尿病になった歳や病気が発症した時の症状などは様々だった。生後2ヶ月で発症した子、高校に入ってから発症した子、体重が1ヶ月で12kgも減ってトイレに頻繁に行くようになって気づいた子、血尿が出て病院に行って検査で分かった子、ただの風邪だと思っていたら糖尿病だと言われた子……。学校では何処で注射をしているのか聞いてみると、教室やトイレ、保健室だと言っていた。でも学校によってはトイレでしか打ってはい

けないという。それを聞いて「この子達が生きていくためにはとても大切な事なのに何でトイレで打たなくちゃいけないの？私達が生きていくために御飯を食べるように、血糖を測って御飯の量を決めてインスリンを打つことだって糖尿病の子にとってはなくてはならないことなのに」と悲しくなった。

小さい頃に発症した子は、もう何年も血糖を測っているから指先の皮が硬くなって測定器の針が刺さらなくなってきたと言っていた。初めは子供が糖尿病になることすら知らなかった私も、このキャンプでたくさんの事を知ることができた。これからも、いろんな事に参加しもっともっと知識を身に付けたい。子供達には、自分の血糖がうまく調節できなくて恥ずかしいなんて思わないで欲しい。I型糖尿病については、もっと多くの人に知ってもらい、外出先での注射は人目を気にせずに行える環境が早く整ったらいいなあと思う。

-----  
我々の社会では、特に意識もせずに共有している暗黙の了解事項がある。そこでは極めて普通に通用しているルールが他者を傷つけていることもある。周囲の無理解が特定の人の意志決定を阻害し、活動制限・参加制約となり、しいては生活機能全般に亘る阻害因子となってしまう可能性もある。

自分たちとは異なった経歴をもち、異なった環境下で暮らしている人々を理解し、様々な生き方を肯定できる様な視点を養うことも福祉教育・ボランティア学習の大きなテーマの一つである。

(平成10年、H高校Eさん2年次のレポート)

…………それは最終日のことでした。川遊びをして濡れてしまった園生さんの着替えを手伝っているとき、園生さんの背中に大きな手術の痕があるのを見てしまったのです。それは、一人だけではありません。ここの園生さん達は確かに、はっきりそれと判る障害をもっています。ですが、その障害と手術の痕が私の頭の中で、どうしても結びつかず、強いショックを受けました。しばらくの間、呆然としていました。みんな私の知らないところで、何かとてつもなく大きなものと闘って生きていることが判り、とても胸が痛くなりました。普段は、みんな、いつも明るく振る舞っていたので、私はハンデというものを少し軽く見ていたのです。後になって、先生に聞いたのですが脳性マヒからくる肢体不自由児の多くは筋緊張が強く、不随意運動を起こします。また、異常な筋緊張のため関節が変形したり、はずれてしまうこともあるそうです。それを防ぐために、筋肉の一部を切ったり、関節を削ったりする手術をするのだそうです。障害が二重の苦痛を引き起こしていると思うと涙がでてきそうです。

生まれ育った家で、家族と一緒に暮らしていけない事一つだけをとっても、寂しいことです。日常の介護が家族の手に負えないという現実も、ある程度は理解できます。

みんな、障害以外に、辛く厳しい現実を背負っているのです。私は三日間、学園のみなさんと一緒にキャンプをしていても、最終日をむかえるまで、障害ということの、ごく表面的な一部分しかみていなかったのです。み

んなが心の奥にしまっている、つらい現状を私は最後になって、少しだけ垣間見たような気がします。…………

ある種の疾病や事故が原因で障害を生じ、さらにそれが二次的な苦痛を与えたり、個人の社会的不利益を引き起こしたりしている。いま健常である生徒達には思いもよらない現象が、そこに存在する。そうした現実を一つずつ知ることによって障害に対する理解が生まれてくる筈である。

(平成13年 N高Tさん3年次の作品)

その日は、みんなと一緒に歌を歌い、手話コーラスを踊って、すぐに友達になりました。ボール遊びや、お誕生会をし、一日楽しく過ごすことができました。何をやるにも一生懸命な子供達、障害を抱えながらも、笑顔の絶えない明るさに、私はとても感動し、幸せを分けてもらったような気持ちになりました。

その後、しばらく経って施設の内情を知ることができました。この施設には親から虐待を受けたことのある子供達が多く入居しているのだそうです。その事実を先生から聞いたとき、私は、車椅子に乗って元気に遊びまわっている子供達、補装具や転倒防止のヘッドギアを付けた子供達のことを思い起こし、頭の中では彼らの笑顔がぐるぐると回り始め、思わず泣きそうになってしまいました。…………

いま、虐待は社会問題になっています。児童虐待の6割が母親によるものだという事実は、とても悲しいものです。障害をもった我が子を抱きながら苦しんでいる母親、子供を乳母車に乗せて公園に集まってくる母親達の輪の中に入っていけずに孤立してしまう母親、そんな姿を想像すると、あの子達の受

けている虐待の背景が少し見えてくるように思いました。虐待は大家族の中では起こりえないものだと思います。核家族化が進んだ現代の社会では、障害児に限らず、子育ては母と子、家族だけの問題ではなく、いろいろな人がかかわりを持ち、社会全体でケアをしていくシステムが必要だと感じました。そして、あの施設の子供達みんなが幸せに暮らせる社会になってほしいと願っています。

この生徒は、家庭の中で起こっている高齢者や児童に対する虐待が、介護者や養育の義務を持つ近親者・実母実父らの手によって為されている事に大きな衝撃を受けた。公園デビューを果たせなかった母親の孤立や、比較的軽度の障害児であればこそその両親のジレンマ等を語っており、よく背景を掴んでいた。

また、障害児施設での体験学習では、児童との関わりの中で、不登校や友人関係との躓きから自身の立ち直りを経験したと云うケースが多く確認できる。麻痺のある腕で食事をとり、手話や指文字を交えながらコミュニケーションを取り合い、車椅子で部屋の中を走り回っている、時には喧嘩もするが、みんな仲良く互いに労り合って暮らしている。何事にも一生懸命な園児達の姿は生徒達に熱いメッセージを投げかけている。

#### 【V】おわりに

生徒達の体験記からは「誰もがよりよい人生を生きていくために、いま、私達は何をしたらよいか？」そんな問いかけが聞こえてくる。そうした永遠のテーマを追い続けていくことが、まさしく福祉を学ぶことなのである。

変化の激しい現代社会を生きる我々には「真実は何か？本当はどういう状態がノーマルであるのか？」といった疑問を持ち続ける姿勢が求められている。

学校教育の場では、より多くの生徒がこうした学びに参加できる様、柔軟なカリキュラムを編成する必要があると考える。